

群 教 七	G06 - 02
	平22.242集

楽しみながら動きを確実に身に付けられる 「多様な動きをつくる運動」指導の工夫

— 系統性を踏まえた指導計画と画像資料の作成・活用を通して —

長期研修員 木戸 達昭

《研究の概要》

本研究では、楽しみながら動きを確実に身に付けられるように、小学校第1学年から第4学年までの「多様な動きをつくる運動（遊び）」の指導計画と画像資料を作成した。指導計画は、系統性（発達段階と習得の順序性）を踏まえ、基本的な動きを身に付ける活動と、身に付けた動きを活用して楽しみながら取り組める活動を取り入れる工夫をした。また、指導計画に合わせて、動きのポイントを短時間に理解できる画像資料を作成した。

キーワード 【**体育 小学校 多様な動きをつくる運動 指導計画 画像資料**】

I 主題設定の理由

平成20年の中央教育審議会の答申では、体育科の課題として「運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しみや喜び、その基礎となる運動の技能や知識など、将来にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分図られていないこと」を挙げている。スポーツ青少年分科会においては「子どもを取り巻く環境が変化し、外遊びやスポーツをする機会が減少したことによって、靴紐が結べない、スキップができないなど体を上手にコントロールできないといった、身体を操作する能力が低下していること」を課題として挙げている。これらを受け、新学習指導要領では、「基礎的な身体能力を身に付け、実生活において運動を豊かに実践していくための資質や能力の基礎を培うこと」を重視して、指導内容の改善を行った。具体的には、全学年で「体づくり運動」を行うこととし、他の領域では扱われにくい様々な体の基本的な動きを培う運動として、「多様な動きをつくる運動（遊び）」（以下「多様な動きをつくる運動」と表記）が、低・中学年の新しい指導内容として示された。また、文部科学省からは、指導の手引きとして、「多様な動きをつくる運動」の具体的な活動を例示したパンフレットが、全小学校に配布された。

平成22年度群馬県学校教育の指針では、「児童生徒ができる喜びを味わえる学習活動の推進」を提唱しているが、その前提として、各種の運動に必要な体の動かし方や身のこなしなど、体の基本的な動きを身に付けておかなければならない。

協力校では、低学年時からサッカーや少年野球、ドッジボールなど地域のスポーツクラブに所属している子どもが多い。しかし、体育授業での子どもの動きを見ると、ボールを上手に投げたり捕ったりできても、マットの上で上手に転がれなかったり、速く走れてもスキップできなかったりと運動技能に偏りがある子どもが目立ってきた。また、ボールを投げるときに投げる手と同じ方の足を踏み出したり、転がるときに体が丸められなかったりと、体の基本的な動きが身に付いていないために、授業で行う各種運動の技能を高められず、学年が進むごとに運動への意欲が低下してしまう子どももいる。

一方、新学習指導要領への移行に伴い、低学年では「多様な動きをつくる運動遊び」を学習することになったが、文部科学省のパンフレットを見ても系統性や指導時期がはっきり分からない、動きがとらえにくく示範しづらいなど、指導する教師に戸惑いが見られ、体の基本的な動きを身に付けるための授業が効果的、効率的に行われていない状況である。

そこで、小学校低・中学年の指導内容に新しく示された「多様な動きをつくる運動遊び」と「多様な動きをつくる運動」において、系統性を踏まえた指導計画や、子どもが動きのポイントを短時間に理解できるような画像資料を作成し活用することで、楽しみながら将来の運動につながる体の基本的な動きを効果的、効率的に確実に身に付けることができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

「多様な動きをつくる運動」の指導において、系統性を踏まえた指導計画や画像資料（連続写真資料と動画資料）を作成して活用すれば、各種運動の技能を十分に身に付けるために必要な体の基本的な動きを、楽しみながら確実に身に付けられることを実践を通して明らかにする。

III 研究の内容

1 基本的な考え方

本研究の「動き」とは、将来体育科で学習する運動やスポーツの基礎となる走、跳、投捕、回る、押す、引く、支える、曲げる、用具を操作するなどの体の基本的な動きのことである。「動き」は、体を使った遊びや運動を通して身に付いていくが、幼児期の外遊びや運動経験の減少から、「動き」を身に付けずに小学校に入学してくる子どもが増えている。このことから新学習指導要領では、「動き」を身に付けるために、小学校低・中学年の指導内容に新しく「多様な動きをつくる運動」が示された。この「多様な動きをつくる運動」は四つの運動から構成されている（表1）。

表1 多様な動きをつくる運動の構成

	(ア) 体のバランスをとる運動	(イ) 体を移動する運動	(ウ) 用具を操作する運動	(エ) 力試しの運動
具体的な動きの例示	○回るなどの動き ○寝ころぶ、起きるなどの動き ○座る、立つなどの動き ○渡るなどの動き (中学年のみ) ○バランスを保つ動き	○這う、歩く、走るなどの動き ○跳ぶ、はねるなどの動き ○登る、下りるなどの動き (中学年のみ) ○一定の速さでかけ足	○つかむ、持つ、回す、降ろす、転がすなどの動き ○くぐる、運ぶなどの動き ○投げる、捕るなどの動き ○跳ぶなどの動き ○乗るなどの動き	○人を押す、引く動きや力比べをする動き ○人を運ぶ、支える動き

表1の運動を通して楽しみながら「動き」を確実に身に付けられるようにするためには、例示されている運動について系統的に指導する必要がある。また、子どもの動きの多様化は、K. Roth※1の子どもの動作発達の系列図によると、平衡（バランス）系、移動系、操作系などが相互に関連し、順序性をもって習得されていく特徴があり、効果的、効率的に身に付けさせるためには、それぞれの運動を子どもの発達段階と習得の順序性を意識して系統的に指導することが重要である。

そこで、「楽しく活動できる系統性（発達段階と習得の順序性）を踏まえた指導計画」を作成し、活用しながら授業を進めることで、楽しみながら「動き」を確実に身に付けられると考える。

子どもが新しい動きを身に付けるためには、動きを短時間に理解することが重要である。そして、理解した動きを確認しながら繰り返し行うことで動きを身に付けていく。動きを短時間に理解したり、確認したりするためには教師の示範が重要となるが、二人組で行う動きなど示範しにくい動きもあり、示範を補う教材として画像資料（動画資料や写真資料）が必要だと考える。また、動きをとらえた画像を参考にすることで、動いているときの姿勢や用具の位置などを工夫することが容易になり、工夫する活動を楽しむことができる。

このようなことから、画像資料を作成し、動きを理解したり確認したりする活動に活用することで、効率よく「動き」を身に付けられると考える。また、画像資料を参考にすることで、動きを変える視点に気付き、動きを工夫しやすくなると思う。

※1 K. Roth：9歳までの運動発達（ドイツハイデンベルグ大 1982）

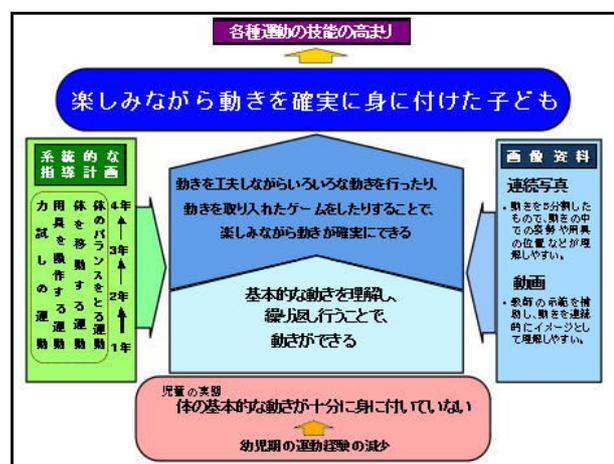


図1 研究構想図

2 教材の概要

(1) 指導計画の作成について

指導計画作成に当たっては、まず、文部科学省が作成したパンフレットに例示された動きを精選し、発達段階と習得の順序性を考慮した四種類の指導内容系統表を作成する（表2）。

次に、子どもが楽しみながら意欲的に活動し、「動き」を確実に身に付けられるように、子どもの発達段階の特徴から、楽しみながら「動き」を身に付けられる学習活動を考える（表3）。

そして、指導内容系統表と楽しみながら「動き」を身に付けられる学習活動を基にして指導計画を作成する。指導計画には学習活動や評価項目の他、画像資料を活用した授業が行えるように、画像資料を活用した支援について記述する欄を設ける。

また、文部科学省が作成したパンフレットに例示された動きの中には、低学年の「走・跳の運動遊び」や「器械・器具を使つての運動遊び」の指導内容と重複する動きもある。これらの動きについては、それぞれ重複する運動遊びの活動に取り入れることが適当と考えられ、複合単位として指導計画を作成する。

表2 指導内容系統表(例)「体のバランスをとる運動」

「多様な動きをつくる運動」学習内容系統表 (ア) 体のバランスをとる運動		* は他の運動遊びの単元で指導する内容			
	1 年	2 年	3 年	4 年	
回るなどの動き	片足を軸にして右回り・左回りに回る。 片足を軸にして右回り・左回りに回る。(友達といっしょに) 1回転して友達とじゃんけんする。	片足を軸にして右回り・左回りに回りながら移動する。 お尻を軸にして右回り・左回りに回る。 背中を軸にして右回り左回りに回る。	棒を立てたまま手を離し、1回転して棒が倒れないうちにつかむ。		
動き 寝ころぶ、起きるなどの動き	* 体を小さくして横に回る。 足の裏を合わせて座り、両手で足をもち、背中を床に接触しながら回り、起きる。 * ひざを抱えた姿勢で床に背中をつけて前後に揺れる。(ゆりかご)	* ゆりかごの後、立ち上がって友達とじゃんけんする。 友達と手をつなぎながら寝ころんだり、起きたりする。	友達と輪になって手をつなぎ、寝ころんだり、起きたりする。	ボールを投げ上げた後、前転をしてから捕る。	
座る、立つなどの動き	友達と向かい合って両手をつなぎながら、立ったり座ったりする。 友達と背中を合わせ、立ったり座ったりする。	友達と背中を合わせ、間にボール等をはさんで立ったり座ったりする。 友達と向かい合って両手をつなぎながら、片足で立ったり座ったりする。	グループで輪になって向かい合い、立ったり座ったりする。 ひざを床につけた姿勢から手を使わずに立ち上がり、じゃんけんをする。		
動き バランスを保つ	友達と向かい合って片足立ちになり、両手を合わせてバランスを崩し合う。 片足で向かい合い、片手を相手の肩にあて、バランスを崩し合う。	友達と輪になって両手をつなぎ、ケンカンで回る。 倉庫で動作を止め、いろいろなポーズで止まる。			
渡るなどの動き			* 平均台などの上を渡る。(姿勢を変えて例：横向き、犬歩きなど) * 平均台などの上で並び順を入れ替わる。 * 平均台の上でヘビじゃんけんをする。 ボールを投げ上げたり捕ったりしながら平均台を渡る。 ボールをつなぎながら平均台を渡る。		

表3 子どもの発達段階の特徴から考えた楽しみながら「動き」を身に付けられる学習活動

	子どもの発達段階の特徴	楽しみながら「動き」を身に付けられる学習活動
低学年	○活動への意欲が持続しない。 ○ゲーム性や競争性を好むが、無我夢中になり、動きが不正確になりやすい。	○身に付けた動きを使った「正確さを競うゲーム」を取り入れる。 ○身に付けた動きを基にした「動きを工夫する活動」を取り入れる。
中学年	○運動経験を重ね、ある程度正確な動きができる。 ○仲間意識が強くなり、集団での活動に関心が高くなる。	○身に付けた動きを使った「記録向上を競うゲーム」を取り入れる。 ○友達とかかわりながら行う「動きを工夫する活動」を取り入れる。

(2) 単元指導計画の例

第1学年 「こうじげんばではたらこう」

1時間に2種類の活動を取り入れる。

単元	バランス・用具 (多様な動きをつくる運動) 5月 2時	作る目標	安全に気を付けて、回る運動遊びや用具を操作する運動遊びに工夫しながら取り組み、体の基本的な動きを身に付けることができる。	評価標準	(1) 関心・意欲 安全に気を付けてまわりを守って、運動遊びや用具を操作する運動遊びをしようとする。	度	(2) 思考・判断 示範の動きを見て基本的な動き方を基にいろいろな動き方を考えている。	(3) 運動の技能 片足を軸にして回ったり、体を使ってボールを運んだりすることができる。	(4) 知識・理解
単元	5月	こうじげんばではたらこう！	学 習 活 動	評価項目 (おまじぎ)	画像資料を活用した支援等				
つかむ	1	活動1：バランスをとる運動遊び ○「ドリルかいてん」をする。① ・軸足をその場から動かさずにして、右回り左回りと両方向に回る。 ○友達と「ドリルかいてん」をする。 ・向かい合って友だちとタイミングを合わせて1回転してもとのように向き合う。 ○友達と「ドリルかいてんじゃんけん」をする。 ・友だちと向かい合い、タイミングをそろえて回ったらじゃんけんをする。	活動2：用具を操作する運動遊び ○「あしクレーン」をする。② ・足首や膝、太ももでボールをはさんで落とさないように運ぶ。 ○足にはさんだボールを落とさず、どこまで運べるかを競う「あしクレーンゲーム」をする。 ・ボールを足にはさんで、10m間かくで置いたカラーコーンを何回往復できるかを競争する。	(1) 関心・意欲・態度 近くに友達がいないことを確かめて回転遊びをしたり、ルールを守ってリレー遊びに取り組んでいる。 (観察・記録)	①の動きを理解するための支援 ・「ドリルかいてん」の行い方を理解できるように、 動画資料や連続写真資料 を提示して説明する。				
追求める	2	○ドリルかいてん」をする。③ ・前時に行った回転遊びを確認する。 ○回転しているときの姿勢を変えた、「おもしろいドリルかいてん」を考える。④ ・腕を伸ばしたり、膝を曲げたり背中を反らしたりなど、回転するときの姿勢を考えて回る。 ○工夫した「ドリルかいてん」を紹介し合う。 ・各自で工夫した回り方を考え、回ってみる。 ・みんなで工夫した回り方を紹介し合い、その回り方を楽しむ。	○ボールを体のいろいろなところに乗せて遊ぶ「ダンパーあそび」をする。⑤ ・お腹や背中にボールを乗せ、落とさないようにボールを運ぶ。 ○ボールを体に乗せて遊ぶ「ダンパーリレー」をする。 ・お腹や背中に乗せたボールをバトンの代わりにして、直線コースを往復するリレーをし、ボールを落とさなかった回数を競争する。	(2) 思考・判断 画像資料(連続写真、動画)を参考にしているいろいろな姿勢での回転の仕方を見つけている。(観察・記録)	②の動きを理解するための支援 ・「あしクレーン」の行い方を理解できるように、 動画資料や連続写真資料 を提示して説明する。 ③の動きを確認するための支援 ・「ドリルかいてん」を正確に行っているのか確認できるように、 動画資料を一時停止した画面や連続写真資料 を提示する。				
まとめる				(3) 運動の技能 軸足を固定して回転したり、体を使ってボールを落とさずに運んだりしている。(観察)	④の動きを工夫するための支援 ・「ドリルかいてん」の回転するときの姿勢を変えて運動遊びを楽しく行えるように、回転しているときの姿勢が分かる 連続写真資料 を提示しながら変える姿勢の例を助言する。 ⑤の動きを理解するための支援 ・「ダンパーあそび」の行い方を理解できるように、 動画資料や連続写真資料 を提示して説明する。				

動きを身に付ける活動

画像資料を活用した支援

動きを工夫する活動

正確さを競うゲーム

興味を引く運動遊び名

(3) 画像資料の作成と活用について

体育の学習では、体を動かしながら運動の技能を身に付けていく活動が中心となるので、言葉で説明するより、実際に動きを見えるようにすることが大変重要である。年齢が低いほど、その傾向は強く、小学校低学年の体育の授業では、教師の示範や友達の動きを見て、その動き方を模倣しながら技能を身に付けていく。「多様な動きをつくる運動」においても、子どもが動きを理解して模倣しやすくするために、教師による示範が大変重要である。しかし、二人組以上の集団での運動のように、教師が一人では示範できない運動もある。また、示範しながら動きのポイントを説明することも難しい。そこで、「多様な動きをつくる運動」の連続写真資料や動画資料を作成すれば、子どもが動きを短時間に理解したり、動きのポイントに気付いたりする上で有効な手だてとなる。

そこで、作成した「多様な動きをつくる運動」の指導計画を基に、授業で子どもに提示する必要がある動きの画像資料(連続写真資料と動画資料)を作成する。連続写真資料は、拡大印刷して掲示したり、学習カードに貼り付けたりできるようにデジタルデータとして作成する。そして、その連続写真資料のデータに、動画資料と動きのポイントを拡大して示した写真へのハイパーリンクを貼り付ける。

連続写真資料は、動いている途中の姿勢や用具の位置を静止画として、視覚的にとらえることができ、動きのポイントとなる姿勢や用具の位置などを考える活動では、拡大したものを提示することによって、積極的に話し合うことができる。また動きを工夫する活動では、基本となる動きを参考にしているいろいろな動きを見付けることができ、工夫する楽しさを味わうことができる。

動画資料は、動き全体をイメージとして理解することができ、低学年では示範の代わりに見ることによって、二人以上の集団での運動も容易に模倣できると考える。中学年では動画資料の動きと友達の動きを比べ、アドバイスできるようになると考える。また、教師は、示範しながらでは難し

い動きの説明も動画を活用することで、動きを示しながら説明することができ、子どもが動き方について正しく理解し、活動することができる。

このように動きを視覚的にとらえられる画像資料を「多様な動きをつくる運動」指導に取り入れることは、子どもが「動き」を確実に身に付けるために有効であると考えられる。

(4) 画像資料(連続写真資料)の例

第1学年 「こうじげんばではたらこう」

連続写真資料 小学校1年生「多様な動きをつくる運動遊び」5月

『こうじげんばではたらこう!』(体育館)

第1時

活動1：回る動きを身に付ける運動遊び(回る)

① ドリルかいてん

動画

この「動画」マークにハイパーリンクが貼り付けてあり、クリックすると動画資料へジャンプ



- 腕を広げて、回転する方に顔を向ける。
- 軸足のかかとを上げる。反対の足を上げて、軽く開く。

活動2：用具を操作する動きを身に付ける活動(運ぶ)

② あしクレーンあそび

連続写真の分割数は、動きのとらえやすさと印刷したときの見やすさから5分割とした。

あしくびクレーン

動画



- 足をそろえるように膝と足首に力を入れる。
- 膝とお腹をバネのように軽く曲げてショックを吸収する。

教師が示範をする際に意識し、子どもにつかませたい動きのポイント

ひざクレーン

動画



- はさんだボールが落ちないように膝を深く曲げすぎない。
- 一度に進む距離を短くする。

ひざはあまりまげない。

動きの説明文にハイパーリンクが貼り付けてあり、クリックすると動きのポイント写真へジャンプ



IV 研究の結果と考察

今回作成した「多様な動きをつくる運動」の指導計画に取り入れた動きを経験することによって、楽しみながら「動き」を確実に身に付けることができると考え、第1学年から第4学年において「多様な動きをつくる運動」の授業を行った。そして、作成した画像資料を活用することによって、動き方や動きのポイントを短時間に理解したり、動きを工夫したりする活動を効率的に行えるようにした。

1 第2学年の実践授業

指導の計画

対象	小学校第2学年	単元名	「ゆうえんちあそび」
期間	平成22年10月14日・21日 2時間	授業者	長期研修員 木戸 達昭
目標	きまりを守ってバランスをとる運動遊びや用具を操作する運動遊びに工夫しながら取り組み、体の基本的な動きを身に付けることができる。		
	主な活動内容	画像資料を活用した支援	
1	活動1 [バランスをとる運動遊び] ◎動画資料を見て、活動1で学習する回転する動きのイメージをつかむ。 ○片足を軸にして回りながら移動していく「ティーカップあそび」をする。 ○お尻や背中を軸にして床の上で回転する「ルーレットあそび」をする。	 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">動きを理解するために動画資料提示</div>	
	活動2 [用具を操作する運動遊び] ◎動画資料を見て、活動2で学習するボールを上に向けて捕る動きのイメージをつかむ。 ○ボールを上に向けて投げ、落ちてくるまでの間に拍手をしてから捕る「ジャグラーあそび」をする。 ◎ボールを投げた後にいろいろな動きを加えて、「ジャグラーあそび」を工夫する。	 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">動きを理解するために動画資料提示</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">動きを工夫するために写真提示</div>	
2	活動1 [バランスをとる運動遊び] ○片足を軸にして回りながら移動していく「ティーカップあそび」をする。 ◎「ルーレットあそび」の動きのポイントを確認する。	 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">動きを確認するために写真提示</div>	
	活動2 [用具を操作する運動遊び] ○二人組で向かい合い、同時に投げたボールを捕る「二人ぐみのジャグラーあそび」をする。 ◎ボールの投げ方や投げたボールの高さなどを変えて、「二人ぐみのジャグラーあそび」を工夫する。	 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">動きを工夫するために写真提示</div>	

(1) 結果

第2学年の実践では、1単位時間を活動1「バランスをとる運動遊び」と活動2「用具を操作する運動遊び」に分け、それぞれの運動遊びを行った。

第1時では、はじめに活動1で取り組む「ティーカップあそび」や「ルーレットあそび」の動画資料を提示した。子ども達は、どんな動きをするのか興味深く動画資料を観察していた。そして、実際にその運動遊びに取り組んだ。「ティーカップあそび」では、「回転しすぎて目が回った」などの声も聞かれ、進んで活動する様子が見られた。「ルーレットあそび」では、尻を軸にしての回

転は、ほぼ全員が成功し、楽しそうにクルクルと回っていたが、背中を軸にしての回転では、半数の子どもが回転できなかった。

次に、活動2で取り組む「ジャグラーあそび」(ボールを上に向けて拍手してから捕る動き)の動画資料を提示すると、どの子どもも積極的に「ジャグラーあそび」に取り組み、あちこちから「できた」「先生見て」と、うれしそうな声が聞かれた。拍手の回数を増やしてみようと投げ掛けると、拍手の回数を増やそうと、集中して取り組む姿が見られた。その後、「ジャグラーあそび」の連続写真資料を提示し、ボールを上に向けた後の姿勢や体の向き、動作が変えられないかと問い掛けると、様々な意見が出された。その意見を参考にして自分の「ジャグラーあそび」を考えようと投げ掛けると、様々な「ジャグラーあそび」を考えたと考えた(表4)。

第2時の活動1では、「ルーレットあそび」の連続写真資料を提示し、動きのポイントについて説明した。背中で回転するためには、背中を丸めた姿勢を保つことが大切だと説明すると、「へえ、そうなんだ」と驚きの声を上げる子どももいた。その後、動きのポイントを意識して取り組むようになり、上手に回転できる子が増えた。しかし、約4分の1の子どもは、背中を丸めた姿勢が保持できず、背中を軸にして回転することができなかった。

活動2では、第1時の「ジャグラーあそび」を発展させた「二人ぐみのジャグラーあそび」の動画資料を提示した。「難しそう」「楽しそう」などの声が聞かれたあと、全員進んでボールを持って体育館に広がり活動を始めた。「せーの」という掛け声を掛けてボールを投げ合い、成功すると「やったあ」と声を出して喜ぶ様子が見られた。次に「二人ぐみのジャグラーあそび」の連続写真資料を提示し、ボールの投げ方や投げるボールの高さを変えられないかと投げ掛けると、第1時の工夫した経験を基にして、様々な「二人ぐみのジャグラーあそび」を考えて行っていた。

技能の評価では、「おおむね満足する状況」と「十分満足する状況」の割合を合わせ96%となった(図3)。

(2) 考察

第2学年の実践では子どもが、全般的に楽しみながら積極的に活動していた。これは、今回の指導計画に取り入れた活動が、2年生の発達段階に合った運動遊びであり、日常の活動で経験することの少ない動きだったことで、運動能力に関係なく興味をもって取り組むことができたからだと考えられる。また、単純な動きから取り組み、その動きができるようになってから、動きを工夫したりゲームを行ったりしたことで、できた喜びを味わうことができたからだと考えられる。

動画資料を拡大してスクリーンに提示したことで、短時間にそれぞれの動きを理解することができた。これは子どもの反応を確認しながら、理解するまで繰り返し提示することができたからだと考えられる。また、動きを工夫する活動では、連続写真資料や動画の一時静止画像を提示したことで、様々な動きを見付けることができた。これは動きの中での姿勢や用具の位置を視覚的にとらえ、動きを工夫するための視点に気付くことができたからだと考えられる。

背中を軸にして回転できなかった子どもが4分の1ほど残ったために、技能の評価で、「おおむね満足できる状況」の割合が25%と、少し多くなってしまった。これは背中を丸めた姿勢での運動経験が少なく、背中を丸めた姿勢を保つ力が弱いことが要因であり、前学年で「ゆりかご遊び」や「横転がり」などの動きをたくさんすることで改善できると考える。

表4 工夫したジャグラーあそびの例

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ・クルクル回って捕る | ・ジャンプして捕る |
| ・後ろむきになって捕る | ・ヘディングして捕る |
| ・おしりの下で手を叩いて捕る | ・ジャンプをして足を開いて捕る |
| ・座って捕る | ・回転してジャンプして捕る |
| ・体の前と後ろで拍手をして捕る | |



図2 ジャグラーあそびを工夫している様子

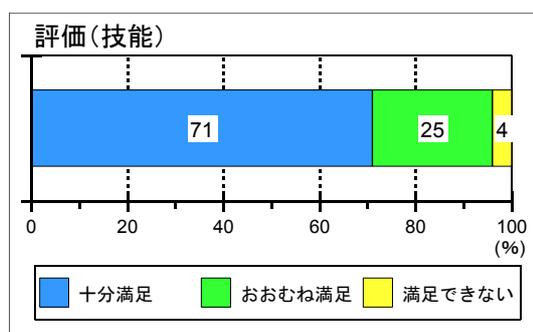
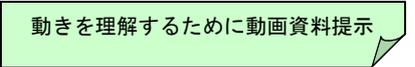
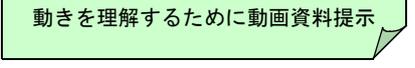
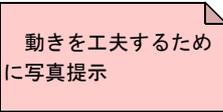
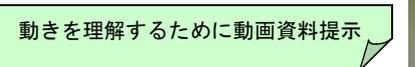


図3 技能の習得状況(第2学年)

2 第4学年の実践授業 指導の計画

対象	小学校第4学年	単元名	「回って、回して！」
期間	平成22年10月20日・27日 2時間	授業者	長期研修員 木戸 達昭
目標	きまりを守って友達と仲よく用具を操作する運動や動きを組み合わせた運動に工夫しながら取り組み、体の基本的な動きを身に付けることができる。		
	主な活動内容	画像資料を活用した支援	
1	活動1 [用具を操作する運動] ◎動画資料を見て、本時活動1で行う動きのイメージをつかむ。 ○二人組で向かい合い、ボールや新聞輪を同時に投げ上げ、落ちる前に場所を交換して捕る「ポジションチェンジレベル1」をする。	  	
	活動2 [動きを組み合わせた運動] ◎動画資料を見て、本時活動2で行う動きのイメージをつかむ。 ○腕や腰でフラフープを回す。 ○腕や腰でフラフープを回し、30秒間で落とさなかった回数を競う「フラフープチャレンジ」をする。	  	
2	活動1 [用具を操作する運動] ○前時を振り返り、四人組の「ポジションチェンジレベル2」をする。 ◎「ポジションチェンジレベル2」の動きを工夫する。	  	
	活動2 [動きを組み合わせた運動] ◎動画資料を見て本時の活動2で行う動きのイメージをつかむ。 ○フラフープを腕や腰で回しながら歩いたり走ったりする。 ○グループになり、「フラフープ回しリレー」をする。	  	

(1) 結果

第4学年の実践では、1単位時間を活動1「用具を操作する運動」と活動2「動きを組み合わせた運動」に分け、それぞれの運動を行った。

第1時の活動1の導入では、「ポジションチェンジ」の動画資料を提示した。子どもは、どんな動きをするのか興味深く動画資料を観察し、「簡単だよ」「早くやりたい」などの声が聞かれた。そして、運動に取り組んだが、ボールを真上に投げられなかったり、すれ違う際にぶつかってしまった様子が多く見られた。そこで、再度動画資料と連続写真資料を提示し、ボールを投げる位置やすれ違うために動くコースを決めておくなどの動きのポイントを確認した。その後、できるようになったペアは増えたが、およそ3分の1のペアは一度も成功することができなかった。

次に活動2で行う「フラフープ回し」の動画資料を提示した。その後、運動に取り組むと全員が腕で回すことができた。3分の2は腰でも回すことができていた。最後にフラフープを正確に回すことを競うゲーム「フラフープチャレンジ」を行うと、楽しそうに取り組んでいた。

第2時の活動1では、「ポジションチェンジ」の成功率を高めるために、まず、指導計画にはないボールを真上に投げる練習を行った。次に、すれ違う動きをスムーズに行えるように、二人組で床に新聞棒を立て、お互いに場所を入れ替えて新聞棒が倒れる前につかむ活動(図4)を行った。そして、ポジションチェンジに再度取り組むと、ほとんどのペアが成功することができ喜んでいった。その後、四人組での「ポジションチェンジ」を工夫するために、連続写真資料を見て、工夫する視点(投げ方・捕り方・



図4 ポジションチェンジを成功させるために取り入れたすれ違う動き

ボールの動き)を確認してから、グループごとに動きを工夫した。どのグループも相談しながら工夫した動き(表5)を見付け、取り組んでいたが、工夫した動きが複雑すぎて成功しないグループも見られた。

活動2では、「フラフープを回しながら移動」の動画資料を提示した。腕で回しながら歩く動きでは、使う腕や回す方向を決めて行ったので、回しにくい腕や回す方向があることに気付いていた。使用したフラフープが大きすぎて、上手に回せない子どもも見られた。最後に、フラフープを回しながらのリレーを行うと、全員が早くゴールしようがんばっていた。速さと正確さを競わせるためにルールが複雑になり、ゴール後すぐに順位がつかず、少し残念そうな表情が見られた。

技能の評価では、「おおむね満足する状況」と「十分満足する状況」の割合を合わせ100%となった(図5)。

(2) 考察

第4学年の実践では子どもが、全般的に楽しみながら積極的に活動していた。これは、今回の指導計画が、友達とかかわりながら行う運動や記録向上を目指して挑戦する運動など、4年生の発達段階に合った活動を取り入れたからだと考える。また、ボールを真上に投げて相手のボールを捕ったり、フラフープを回しながら移動したりする非日常的な動きは、運動能力に関係なく興味をもって取り組むことができたと考える。

第2時に、指導計画にはない動きを練習したことで、二人組のポジションチェンジができるようになった。このことから、4年生でポジションチェンジを成功させるためには、ボールを真上に投げる動きや、二人の場所をすばやく交換する動きなどを3年生までに経験して、身に付けておく必要があると考える。

動画資料を拡大してスクリーンに提示したことで、短時間にそれぞれの動きを理解することができた。これは動きを理解しているかどうか、子どもの反応を確認しながら繰り返し提示することができたからだと考える。また、四人組のポジションチェンジを工夫する活動では、連続写真資料や動画の一時静止画像を提示したことで、様々な動きを考えることができた。これは動きの中での投げ方や捕り方、ボールの動きを視覚的にとらえ、動きを工夫するための視点に気付くことができたからだと考える。しかし、工夫する視点しか与えなかったために、能力に合っていない動きを目指して、できる喜びを味わえないグループもあった。工夫する視点だけでなく、発達段階に合った動きの変え方を例示することで、どのグループもできる喜びを味わうことができたと考える。

3 まとめ

(1) 指導計画について

事後のアンケート結果(図6)より、第2学年、第4学年とも楽しんで活動していたことが分かる。授業後の技能の評価は、図3、図5から分かるように、両学年とも「十分満足できる状況」と「おおむね満足できる状況」を合わせるとほぼ100%に近く、それぞれの学年に取り入れた動きが、子どもの発達段階を踏まえており、実践を通して「動き」を確実に身に付けることができたことが分かる。

しかし、「十分満足できる状況」の割合が約70%と低くなっている。これは、第2学年の「せなかルーレット」(背中を軸にして回転する動き)と第4学年の「四人組のポジションチェンジの工夫」の成功率が低かったためである。このことから、「動き」の習得には順序性があり、学年の発達段階に応じた「動き」を、しっかり身に付ける必要があると考える。

表5 工夫したポジションチェンジの例

・片手で投げる	・片手でキャッチ
・ボールをバウンドさせる	・しゃがんでキャッチ
・バレーのトスみたいに投げる	・反対方向に動く
・ジャンプしながら投げる	

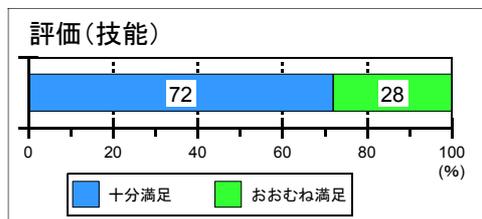


図5 技能の習得状況(第4学年)

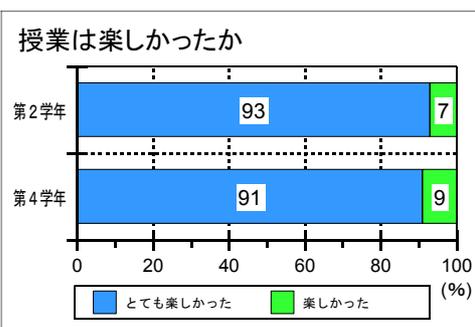


図6 事後のアンケート結果

(2) 画像資料について

事後のアンケート調査（図7）から、動画資料を見て動きが「よく分かった」と答えた子どもの割合が高いことが分かる。特に単純な動きを提示した第2学年では、「よく分かった」と「分かった」を合わせると100%であり、学年が低いほど動画資料が動きの理解に有効であることが分かる。

動きのポイントについてのアンケート調査（図8）では、ほとんどの子どもが写真資料を見たことで動きのポイントが「よく分かった」「分かった」と答えたが、第2学年では「少し分かった」と答えた子どもが7%、第4学年では「分からなかった」と答えた子どもが3%いた。このことから、動きのポイントを理解しにくい資料もあったことが分かる。

授業の観察や学習カードからは姿勢や用具の位置などを変えて、動きを工夫したことが分かった。写真資料から姿勢や用具の位置など変える視点が分かったことで、動きを主体的に工夫することができたと考える。

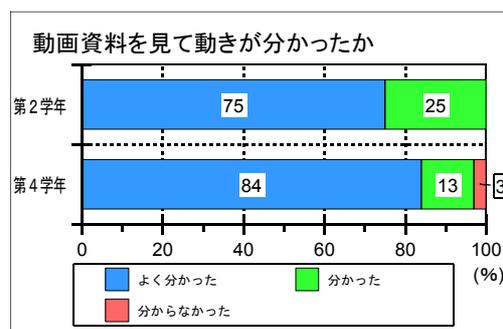


図7 事後のアンケート結果

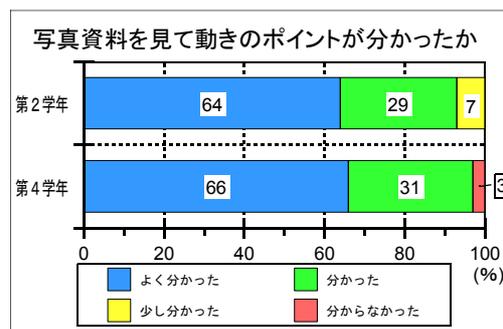


図8 事後のアンケート結果

V 研究のまとめ

1 成果

- 子どもの発達段階や習得の順序性を意識して作成した、系統性を踏まえた指導計画を基に学習を行ったことで、動きのバリエーションを増やしたり質を高めたりするなど、「動き」を確実に身に付けることができた。
- 子どもの発達段階の特徴から考えた、楽しみながら「動き」を身に付けられる学習活動を取り入れたことで、運動技能に関係なくほとんどの子どもが、記録に挑戦したり動きを工夫したりする楽しさを感じながら意欲的に学習に取り組むことができた。
- 画像資料を活用した授業を行ったことで、動きのポイントを短時間に理解して進んで活動したり、動きを工夫する視点に気付いて自分の考えた動きを表現したりすることができた。

2 課題

- 作成した指導計画には習得の順序と子どもの実態にずれも感じられた。今後は更に子どもの発達段階と身に付けさせたい「動き」の分析を行い、指導計画を修正する必要がある。
- 指導計画に取り入れた動きの正確さを競うゲームには、ルールが複雑なものもあった。今後は取り入れるゲームのルールを子どもの実態に合わせて単純化する必要がある。
- 指導計画に取り入れた動きの中には、写真資料では理解しにくい動きもあった。今後は更に動きの特徴を分析し、より分かりやすく提示できる写真資料を作成する必要がある。

<参考文献>

- ・高井 和夫 著 『子どもの調整力に関する研究動向について（第2報）』 文教大学教育学部紀要第41集(2007)
- ・渡邊 彰、今関 豊一 編著 『小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり 体育』 東洋館出版社(2009)
- ・高橋 健夫、松本 格之祐 他4名 編著 『すべての子どもが必ずできる体育の基本』 学研教育みらい(2010)